

～あした、転機になあわ!～

# 笑いから... 哲楽さびら。

職場を元気にする哲楽レシピ その三

## 「笑顔オタク」の哲楽論

働く人の「心の様子」は「お店の様子」として表れる

このところ、「医療現場」とのかかわりが多くなっていることもあり、医師の方々とお話しする機会も増えました。日々、いのちの現場と向き合うプロの皆さんからは、大きな勇気をいただいています。先日、外科のM先生とのお話の中で印象深かったのが「私は、オタクです」という言葉。いつも、どうしたらこのガンが治せるのかを考えているから、とのことでした。

「私もきつと、オタクにちがいない!」と直感し、自分は何オタクなのか考えてみました。何日か経ったある日ふと頭に浮かんだのが「笑顔オタク」という答え。

あまり笑わない人に出会った時には、「どうしたら、この人は笑ってくれるのだろうか?」と哲楽し、笑顔のない職場に出会ったら、「ここに笑顔が生まれるために、何があったらいいのだろうか?」とアイデア探しのスイッチがONになるのです。仕事の時間はもちろん、休日のショッピングや食事に出かけた先でも、笑顔のない現場やちよつとしたもめごとにも偶然居合わせた時には、同じようにアンテナが反応します。

さまざまな「仕事の現場」と「現場で働く人」と向き合って10年にな

りました。「紀々さんは、占い師みたい!」と言われるのは、きつと(いえ、間違いなく)予知能力ではなく、経験によるもの。はじめて足を運んだ現場で詳しいことを聞いていなくても、何となく「もしかして」と色々感じるようになりました。

働く人の「心の様子」は、私たちが考えているよりもずっと「お店の様子」として表れているもの。実際に、スタッフ間のコミュニケーションが良くなり、数字も上向いてきたお店で、お客さまから「電球替えたの? 前より明るくなったね」と言われたケースがありました。

おそらく、その反対のネガティブな状況・変化も、同じように伝わっているのだと思うと、ちよつとドキッとしますね。

### 相手を理解すること、自分にも笑顔が生まれる

「笑顔が生まれる環境」をいつでもどこかで考えている笑顔オタク:そんな私の頭に浮かんだのは、「笑顔がある場とない場」が持つ、コミュニケーションのちがいがい。人を寄せつける雰囲気と、そうでない雰囲気の持つちがいでもあります。

キーワードは、「責」と「利」。これが「自分」と「相手」のどちらに向けられるかが、分かれ目のような

気がします。

まずは、「責(責任:のせい)」。余裕がなくギスギスしている職場では、何かが起こった時に「相手」に「責」をつけて「あなたのせい」にしてしまいがち。そうになると、「ごめんね」も「お互いさま」も出なくなってしまう。これを、「自分」に向けて考えられると、攻撃色がグッと薄くなり、アイデアに加え、やさしい気持ちも生まれるようになります。

もうひとつは、「利(利益:のため)」。キレイごとのように聞こえますが、笑顔が生まれる職場には「相手のために」という発想が根っこにあると感じます。「自分の商品が売れるために」ではなく、「相手に喜んでもらえるために」、「自分の気持ち伝えるために」ではなく、「相手の気持ちを理解するために」。「利」が「相手」に向くと、自分と相手の両方に笑顔が生まれるようになります。つまり、2倍の明るさになります。

これは、ひとつの風土のように感じることもあります。哲学ともいえるかも知れません。トップや先輩の習慣が、職場全体に広がっていることも多いからです。

もしも職場がギスギスしていたら、お客さまが遠ざかっていたら:「責」を相手に、「利」を自分に向け

てしまっていないませんか? ぜひ、職場の皆さんで、時々見つめてみてください。

「きつと、バブルのときには置き去りになっていた本質」に目が向けられる時代になったんですね。オタクドクターの先生方とのお話に、大きな納得がありました。私が哲学の重要性を感じた理由も、同じ。正解のない「笑顔が生まれる環境づくり」について、これからもオタク根性で哲楽してまいります!

あなたのアンテナ...  
どこを向いていますか?



紀々(きき)

哲楽家。那覇市出身。1998年に早稲田大学第一文学部哲学科東洋哲学専修を卒業。「自ら考え、自ら動く力を磨く社員研修を」との依頼を受け、「哲楽のチカラを、笑顔のチカラに」をテーマに、さまざまな企業現場でサポートを行っている。特に「若手リーダー・女性スタッフがイキイキ元気に働ける職場づくり」を哲楽する研修は、好評。現在は、沖縄の表現で「Let's 哲楽」を意味する「哲楽さびら。」を合言葉に、沖縄発で職場に哲楽習慣・風土を広めるべく活動を展開中。